

京都女子大学図書館所蔵『好色安万於布襦』

正 木 ゆ み

一 京都女子大学図書館所蔵『好色安万於布襦』

京都女子大学図書館に、『好色安万於布襦』（内題による）という江戸時代の版本一冊が所蔵されており、貴重書に指定されている（請求番号 913・57/K087）。京都女子大学図書館OPACで本書を検索すると、「出版情報：『出版地不明』：『出版者不明』『元禄年間？』、（中略）著者名：西川祐信（1670-1731）」とある。この情報によると、『好色安万於布襦』は、江戸時代中期に京都で活躍していた浮世絵師西川祐信が作画した作品であり、従来知られていない祐信作品ということになる。

しかし、本書を調査した結果、『好色安万於布襦』という全五巻の書と、西川祐信画『艶色玉簾』（享保四年「一七一九」正月刊、八文字屋八左衛門）の巻三のみを取り合わせた本であることが明らかになった。『艶色玉簾』の巻三巻末に「大和絵師 西川祐信画」とあることから、OPACでは、『好色安万於布襦』の「著者名」を西川祐信と認定したと推測される。

『艶色玉簾』は『妻愛色双六』の改題本と推定されており、祐信が春画を描いた、いわゆる「浮世草子の艶本」である。巻一の序文では、役者評判記の出版をめぐって確執のあった八文字自笑と江嶋其磧の和解について記している。『好色安万於布襦』に取り合わせられた『艶色玉簾』巻三では、釣られ女、蓮葉おじゃれ、綿摘み女、小歌比丘尼、大黒、間短（下級の私娼）、惣嫁といった好色風俗に身をゆだねる女性達と男性の色事をめぐる話（著者未詳）が、祐信の春画とともに描かれている。

一方、『好色安万於布襦』は、未紹介の書であり、『艶色玉簾』と同様、様々な男女の色事をめぐる話を、春画と共に描いた「浮世草子の艶本」である。国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録データベース」で本書を検索すると、「統一書名 好色あまをぶね（こうしよくあまおぶね）／巻冊 五冊／別書名「1」好色安満於布襦（こうしよくあまおぶね）／分類 艶本／成立年 元禄年間刊？／著作注記（般）日本艶本目録（未定稿）による」とある。「艶本」と分類される性格上、所蔵機関は掲載されていない。

春画や艶本の研究については、従来、タブー視される傾向にあったが、近年、石上阿希『日本の春画・艶本研究』（平凡社、平成27・2）が出版され、近世文学・文化・出版研究と春画・艶本研究が分断されるべきではなく、互いに連続したものとして行われることの必要性と、そのような問題意識に基づいた研究成果が示された。なお、石上氏は、「日本国内外の研究機関・博物館・図書館や個人コレクターなどが所蔵する資料を対象」として、「近世期に制作された艶本の所在情報、書誌情報を検索できるようにした」「近世艶本総合データベース」も作成、公開されているが、このデータベースにも、まだ『好色安万於布襦』は登録されていない。

また、平成27年秋に東京の永青文庫、平成28年冬から春にかけて京都の細見美術館にて、日本初の「春画展」（十八歳未満入場禁止）が開催され、それぞれに多くの入場者を動員し、話題になった。

このように、日本近世文学研究者によって春画・艶本研究の意義と成果が示され、春画・艶本が展覧会で公開されて盛況であった近時の状況を踏まえ、小稿では、未紹介の艶本『好色安万於布襦』について、その概要を紹介するものである。

後述するが、本書の挿絵は、江戸時代前期に江戸で活躍した浮世絵師菱川師宣（元禄七年〔一六九四〕没）風の画風であり、本書が江戸で出版されたことを推測させる。師宣は、艶本、春画も多く手がけており、本人またはその一派の絵師が本書の挿絵を描いた可能性もあるが、稿者では明確な判定ができないため、専門家の方々のご教示をお願いしたい。

二 『好色安万於布襦』と『艶色玉簾』巻三の書誌

本節では、『好色安万於布襦』と、後半に取り合わせられている『艶色玉簾』巻三の書誌を記す。書誌では、『好色安万於布襦』は、『安万於布襦』と略称する。□は破れを示す。

〔体裁〕 半紙本一冊。袋綴。表紙は、『艶色玉簾』の原表紙（藍色無地）。縦二二・〇cm×横一六・〇cm。

〔題簽〕 『艶色玉簾』の原題簽の一部が、原表紙に一〇・〇cm程度残存。横三・三cm。中央。□□玉すたれ。

〔匡郭〕 『安万於布襦』↓四周单边。縦一八・八cm×一三・五cm。

『艶色玉簾』巻三↓四周单边。縦一八・一cm×一三・〇cm。

〔行数〕 『安万於布襦』↓（序）一〇行、（本文）一二行。『艶色玉簾』巻三↓一〇行。

〔丁数〕 全七二丁。

『安万於布襦』 ↓五六丁。(序) 一丁、(目録) 二丁、(巻二) 一〇丁、(巻二) 一三丁、(巻三) 一二丁、(巻四) 八丁、(巻五) 一〇丁。

『艶色玉簾』 卷三 ↓一六丁。

〔版心・丁付〕 『安万於布襦』 ↓(序・目録・巻二) 「あま一 一〜十三」、(巻二) 「あま二 一〜十三」、(巻三) 「あま三 一〜十二終」、(巻四) 「あま四 一〜八〇」、(巻五) 「あま五 一〜十」。

『艶色玉簾』 卷三 ↓「色 三ノ巻 二、四〜十八」。

〔挿絵〕 (以下、洋数字は実丁数) 『安万於布襦』 ↓(巻一) 5ウー6オ「書き入れあり」、9ウー10オ「同前」、(巻二) 15ウー16オ「同前」、20ウー21オ、(巻三) 29ウー30オ「書き入れあり」、33ウー34オ、(巻四) 39ウー40オ「書き入れあり」、43ウー44オ「同前」、(巻五) 47ウー48オ、53ウー54オ。

『艶色玉簾』 卷三 ↓58ウー59オ、61ウー62オ、63ウー64オ、66ウー67オ、69ウー70オ「書き入れあり」、71ウー72オ。

〔著者・画師〕 『安万於布襦』 ↓著者未詳。序者、林睡。画師未詳(菱川師宣風か)。

『艶色玉簾』 卷三 ↓著者未詳。画師、西川祐信。

〔目録題〕 『安万於布襦』 ↓「目録」、『艶色玉簾』 卷三 ↓なし。

〔内題〕 『安万於布襦』 ↓(巻一) なし、(巻二) 「好色安万於布襦巻二」(図1参照)、(巻三) 「好色あまをぶね巻三」、(巻

四) 「好色阿万を婦襦巻四」、(巻五) 「好色安万於布根第五」。

『艶色玉簾』 卷三 ↓なし。

〔刊記〕 『安万於布襦』 ↓なし。

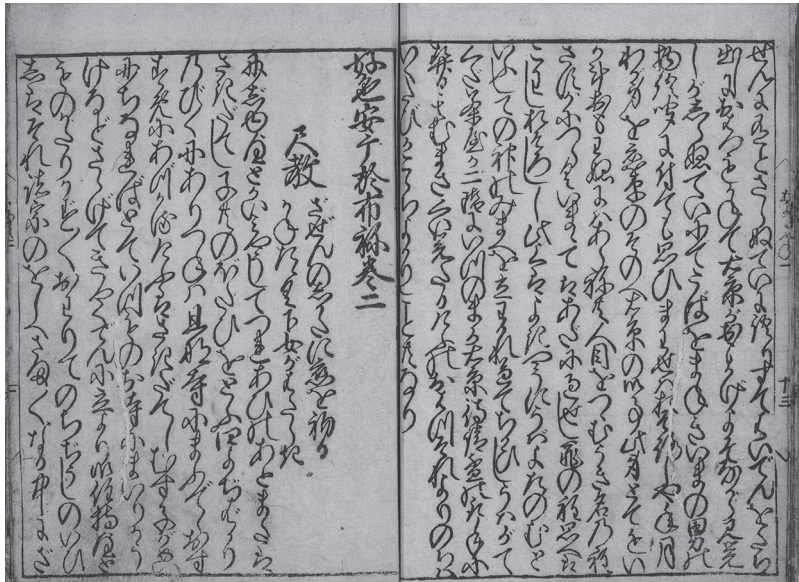


図1 『好色安万於布襦』（13ウ、14才）

『艶色玉簾』 卷三 ↓ 「つちのとの亥」

初春 大和画師 西川祐信筆「祐信の印」

〔備考〕

表紙見返しに、「丹後国湊大向村／木下五良太□」
と墨書あり。旧蔵者の署名と推測される。1ウ上欄に

「大」、6ウ上欄に「向」、10ウ上欄に「村」、12ウ上欄
に「木」、16ウ上欄に「下」、18ウ上欄に「五」（見せ
消ち）、19ウ上欄に「五」、22ウ上欄に「良」、25ウ上
欄に「太」、28ウ上欄に「丈」、31ウ上欄に「為」、35
ウ上欄に「吉」、37ウ上欄に「主」、60ウ上欄に「丹」、
64ウ上欄に「後」、65ウ上欄に「国」（見せ消ち）、66
ウ上欄に「国」、67ウ上欄に「湊」、70ウ上欄に「湊」
と墨書。上欄の文字を組み合わせると、見返しに記さ
れた旧蔵者の署名と、ほぼ一致する。26ウに、墨書に
よる落書きがある。

上記の「体裁」「題簽」より、京都女子大学図書館所蔵『好
色安万於布襦』は、『艶色玉簾』の原表紙を利用して、『好色
安万於布襦』全五巻と、『艶色玉簾』巻三を取り合わせた本

であることがわかる。そして、このような取り合わせ本を作った所持していたのは、「備考」に示した旧蔵者の「木下五良太」である可能性が高い。『艶色玉簾』については、卷三のみを取り合わせている理由は不明である。

さらに、「挿絵」で示したように、『好色安万於布襦』の挿絵、つまり春画の大部分に、登場人物のセリフなどを、旧蔵者が墨で書き入れている。版本の春画にセリフなどを入れて印刷することは、菱川師宣の艶本『床の置物』（天和年間「一六八一〜一六八四」刊）が、早い例とされる。¹⁰⁾ ちなみに、『艶色玉簾』卷三の春画には、すべて、登場人物のセリフなどの書き入れが、画師の祐信によって記され、印刷されている。

『好色安万於布襦』の春画における書き入れが、「木下五良太」によるものか、他の旧蔵者によるものであるのかについては不明であるが、いずれにしても、艶本の春画にセリフなどを書き入れて印刷する例が多いことにならない。『好色安万於布襦』の話の内容に合わせて、旧蔵者が、自分自身で、春画にセリフなどを書き入れ、楽しんでいたことが推測される。¹¹⁾

このように、京都女子大学図書館所蔵『好色安万於布襦』からは、二種の「浮世草子の艶本」を取り合わせたり、春画にセリフなどを書き入れをするなどして、艶本を享受していた読者（たち？）の姿をうかがい知ることができよう。

三 『好色安万於布襦』の序文と、目録に記された章題

本節では、『好色安万於布襦』の序文と、目録に記された章題を翻刻して、紹介する。以下、小稿では、『好色安万於布襦』を初めとする近世資料の翻刻に当たっては、適宜、通行の字体に改めたり、句読点を付けるなどした。『好色安万於布襦』の丁移りは、「」で示し、目録の巻第二までの章題における割書、および、巻第三からの章題の改行は、／で示した。

序

いざなぎいざなみの二神一女三なんを産給ひしより、夫婦婚合の道今に伝ひ、古人のぬれ文見たものもなし。それからそれにおしゆるにあらねど、おのつから此道にかしこくしやうじきになく鳥の声々／＼あかつきの火事太鼓夜来拍子木に恋のきぬ／＼をうらみ、秋の色ある虫は、ともしびに身はこがせど、恋のわかればしらぬものをと、つまらぬ事までをわが恋に思なぞらへ、親のゆるしてあわせし女房、むこ(1オ)入の娘、ごけいりのふる女、髪切の後家、つり出しの下女、よばひのおんなに、道ならぬ恋の一いろ、やせのざこね、雲の上にも恋の哀をしる七夕。もろこしに、まつくろぼうといふものはあまさへ恋に気のみぢかく、わが朝のみるかる男、野、末／＼に草かるおやぢ、山の奥成狩人まで、色に心をくだくらん。世中に絶て桜のなかりせばとよみしは昔も恋に身をよするにやと、其貫之といふ人も今見るやうに思ひ候。人間万事さいわうが心の駒のあらたづな、ゆるさぬ人こそ恋しりなれ。

林睡誤序」(1ウ)

目録

巻第一

- 一 春 かきごしにつくかげのはごいた／若衆女桜にもたれてみつのゑん
- 一 夏 こばたたてぬも女房がむつ事／うけ身おしゆる松屋がいつわり
- 一 秋 しやうれうまつりにのみかなへる／ふたおやもちし娘をたばかり
- 一 冬 中だちしたる雪の日のいぬ／鏡をまふりてねふる女
- 一 神祇 神前にかたる小町が絵すがた／つれなき娘もひけばなびく(2オ)

第二

- 一 尺教 さぜんのおしゑに見そめたる恋／かねたゝく下女もおもわずはたらく
 - 一 無常 つちくいの名を得し六蔵がさた／にせゆふれいのれきのふとさよ
 - 一 旅宿 とりちがへたる下女のねどころ／そのぬししれずしめて三ばん
 - 一 遊女 むしんのいへるとりんぼのさた／いんどううけてまよはざる道
 - 一 後家 わが子ながらもはたらきぞよし／りはつにあまるねやの手習
 - 一 ひくに 壺すいれ候へは壺分だす金／礼金もとらぬびくにかごまごと」(2ウ)
- 第三

- 一 せいもんたて、もなく声のごせ／一 直段のたかき作兵衛が道具／一 おもひをはらす念仏のには／一 風味ふうみ
- をわすれぬ遊女が実心

第四

- 一 風呂屋のさうじも百両の礼金」(3オ)／一 拍子あまりてねのとまる三味
- 第五

- 一 いたづらなる子は母の中だち／一 作都さくちがひるねにくわほう成坊主ねて女となる
- 一 なんによ秘会の大論 十ヶ条／附り薬方色々」(3ウ)

さて、序文は、「いざなぎいざなみ」の神々による夫婦の契りの神話から説き起こし、神話の昔から、当代に至るまで、あらゆる身分・立場の男女が色事に心をくだくものである様について述べている。石上阿希は、「艷本の冒頭に伊弉諾・伊弉冉の神話を引く例は江戸初期から見られる」と指摘している。『好色安万於布襷』でも、その型を踏襲しているこ

とがうかがえる。

伊弉諾と伊弉冉の夫婦の契り、「一女三男」の神々の誕生などに触れつつ、神話の昔の色事の始まりから、当代の色事の盛んなることに触れている類似例として、吉田半兵衛画、酒楽軒序『好色伊勢物語』（貞享三年「一六八六」刊、永田長兵衛・西村半兵衛版）の序文の一部を引いておく。

夫、色道は、むかし、伊弉諾伊弉並尊共夫婦し給ひて、（中略）男女交合の道は生まれり、と。（中略）こゝに清して、子細らしきは至て親仁となり、酔て鈍きものは、うかれて好色男とよばるゝありて、中比、中嶋のうき（二才）世橋のもとにて、一女三男に逢給ひし、（中略）是より情の道ひろく泥（後略）

また、菱川師宣の艶本『恋のはなむらさき』（天和三年「一六八三」刊）の序文も、天の浮き橋での二神の契りより恋の道が始まったことから書き起こし、「人間万事」という表現で結んでいるところが、『好色安万於布襪』の序文と類似しているため、次に一部を引く。

むかしく、うきはしのもとより、恋といふおかしきこととしてそのたねをまきちらし給ふにより、末の世にはびこりて人と成ぬ。（中略）人間万事双六さいと打とめ訖

以上、『好色安万於布襪』の序文と、他の艶本、好色本の序文との類似を指摘した。序者の「林睡」については未詳である。

章題については、巻第一から第二の「遊女」のあたりまでは、歌集の部立てや和歌などの題を思わせる言葉が、章題の上に付いている。「遊女」に続いて、「後家」「ひくに」など、近世の好色風俗の女性を列挙する。第三からは、章題の上の言葉は付いておらず、やや不統一な印象を与える。

また、目録の章題と、本文の各話前に付けられた章題については、巻第三以外の巻において、文言に小異が見出せる

四 『好色安万於布襦』巻五における養生書『黄素妙論』の受容

本節では、前節の目録で挙げた巻第五の「一 なんによ秘会の大論 十ヶ条／附薬方色々」を取り上げ、養生書『黄素妙論』の受容の可能性を指摘したい。当該部分は、50オウ56ウで、巻末の六丁分に当たる。本文の章題では、「なり平秘密の丹論」とあり、在原業平が、美女に、男女の房中の秘伝と、「房事に効能のある薬の製法について問う」という形式になっている。

その形式、および、内容は、安土桃山時代の著名な医師曲直瀬道三が、天文二十一年（一五五二）に松永弾正に献上した（成立年は不明）房中に関わる養生書『黄素妙論』に、直接または間接的に拠っていることが指摘できる。『黄素妙論』は、明の嘉靖一五年（一五三六）刊の『素女妙論』を道三が抄出和訳したもので、『黄素妙論』では、黄帝が房中術に通じた神女である素女に房中の秘伝を問う形式になっている。

石上阿希は、『黄素妙論』が絵巻、写本、版本などで広く流布したこと、および、近世期通して艶本に受容されていること、その受容は、主に上方の艶本を中心に見られることなどについて詳述し、また版本の諸本については、六種に整理している。¹⁶ 『好色安万於布襦』は、前述した江戸の出版という推測が妥当であれば、江戸の艶本における『黄素妙論』の受容例として注目されよう。

以下、今少し具体的に、『好色安万於布襦』第五「なり平秘密の丹論」における『黄素妙論』との関連について述べておく。『黄素妙論』については、石上が整理した版本の六種の諸本の内、江戸前期京都長島与三郎復刻本（以下「長島本」）（大本一冊）（国立国会図書館デジタルコレクション¹⁷）の本文との比較を行ったが、便宜上、文化五年跋の復刻

本（以下「文化五年本」）（中本一冊）（京都大学附属図書館所蔵 マイクロフィルム版富士川文庫¹⁸）掲載の目次も参照し、『好色安万於布襦』第五が利用したと推測される部分を、文化五年本の目次掲載の題で示す。

『好色安万於布襦』第五「なり平秘密の丹論」の冒頭は、次の通りである。

なりひら美女に問てのたまはく、男女のけうかうのひくわひはいかん。女こたへていわく、天地あんやうけうがうせずして、万物生せず。男女のけうがうせざるとき、じんりんめつして、子そんといふ事もなし。しかりといへ共、けうがうするにひてんようじゆつあり。これまことによう^A（50才）じやうのめう^Bだうなり。君しろしめしたるやいなや。御たづね候へかし。一々にのべ申さん。^F

ここでは、美女が、男女の交合は、子孫を生むために必要な営みであること、しかし、その交合には秘伝があり、養生の妙道であることを説いている。

これは、次に引用する『黄素妙論』の「交合和違」（女性が交合を望む徴候に関する五つの秘伝を説いた箇所）の冒頭を、適宜、省略・改変したものと推測される。『好色安万於布襦』第五「なり平秘密の丹論」の冒頭と類似する部分に傍線を付して、対比した。

くはうていとふてのたまはく、おとこをんなのましはり和違いかん。そちよこたへていはく、それてんちいんやうかうがうしては万物をしやうじ、なんによのいんやうましはりあひてしそんをしやうす。しかるあひだ、てんちいんやうましはらざる時は、四時ならず。ばんもつしやうぜす。男女のいんやうあはざる時は、じんりんめつして、しそんたゆる。しかりといへとも、くはいかうするにひてんようじゆつあり。これまことにやうじゆつのおうぎ、やまひをいやすめう^Eどうなり。いまことくこれ^Fをのへん。

『好色安万於布襦』第五「なり平秘密の丹論」では、先に引用した冒頭部に続き、美女が、女性が交合を望む徴候に

関する五つの秘伝を語るが、それについても、『黄素妙論』の「交合和違」の本文を適宜省略・変更したものとなっている。ただし、五番目の秘伝のみ、『黄素妙論』の「交合和違」およびその他の箇所にも見出せない内容の本文が一部挿入されており、また、五番目の秘伝の後に、『黄素妙論』の「交合和違」ではなく、「浅深利害損益之弁」の本文からの引用が見られる。

それに続いて、『好色安万於布襦』第五「なり平秘密の丹論」では、『黄素妙論』の「八深六浅一深之論」、「五傷之法」、「淫情十動之候」、「交所吉凶之弁」、「房中薬術」からの引用が見出せるが、いずれも適宜、省略・変更が見られる。特に、「房中薬術」については、『好色安万於布襦』第五「なり平秘密の丹論」では、『黄素妙論』と同じ薬であっても、製法に異同が見られる。たとえば、『黄素妙論』では、心の深い女性に使用する「緑鴛膏」の製法について、次のように記す。

○ちやうじ 三りう ○さんせう 四りう ○さいしん ○りうこつ ○かいへうせう ○みやうばん をのくすこし
はかり 右六いろをこまかにふるひて（後略）

一方、『好色安万於布襦』第五「なり平秘密の丹論」では、「緑鴛膏」の製法について、次のように記す。『黄素妙論』と重なる部分に傍線を付した。

一 しゃうさん 一 ふし 一 りうこつ 一 いかのこう 一 さいしん 一 みやうばん 一 さんしやう
三つぶ 此七いろを粉にして（後略）

このように、同じ薬であっても製法に異同が見出せるのである。

以上、『好色安万於布襦』第五「なり平秘密の丹論」では、『黄素妙論』からの影響がうかがえ、適宜省略・変更して利用していることが明らかになった。ただし、『好色安万於布襦』第五「なり平秘密の丹論」に、独自の本文や、葉の製法に異同等が見られることから、あるいは、『黄素妙論』を利用した別の艶本などを参照した可能性も考えられる。



図2 『好色安万於布襦』巻一ノ一（6才）

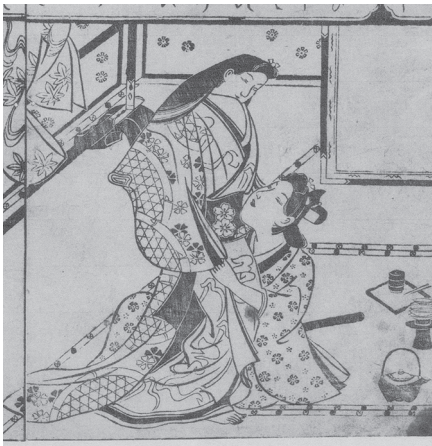


図3 菱川師宣『雑書枕』

いずれにしても、『好色安万於布襦』第五「なり平秘密の丹論」が、江戸の艶本における『黄素妙論』の受容例となる可能性を指摘しておきたい。

五 『好色安万於布襦』の挿絵

第一節でも触れたように、『好色安万於布襦』の挿絵の画風は、菱川師宣風である。次に、『好色安万於布襦』挿絵の事例を示し、師宣の絵と並べてみる。

図2は、『好色安万於布襦』巻一ノ一における、隣同士の十六歳の若い男女が親達の目を盗んで忍び逢う場面を描く挿絵である。若衆がしゃがんだ姿で若い娘を口説く姿は、師宣の艶本にも見出せる。図3は、男女の相性を説いた師宣

画の艶本『雑書枕』（延宝六年「二六七八」刊）の挿絵（国際日本文化研究センターデータベース「艶本資料」より掲載）である。人物の顔などの画風も若干異なるが、類似は認められよう。師宣以外の絵師が図2を描いたとしても、図3のような師宣の挿絵を参照した可能性が高いと考える。

また、図4は、『好色安万於布襦』巻二ノ一における、比丘尼と寺の住持との情事を描いた春画の一部である。比丘尼の情事を描いた春画も、師宣の艶本に見出せる。図5は、師宣画の艶本『好色いと柳』（元禄頃刊）の春画（国際日本文化研究センターデータベース「艶本資料」より掲載）の一部である。『好色いと柳』は、「各頁の上段を左右に二分して、左に見出しとコマ絵、右にその絵の解説として遊女、茶屋女、素人女などの口説きのかけひきを述べ下段に春画を入れ⁽²⁰⁾」たものである。図5は、若い男が比丘尼の口説きに成功して情事に至った様子を描く。図4と図5は、比丘尼の表情や腕の描写、男の口、腕、背中中の描写に類似が認められる。しかし、図4が師宣画とは断定できない。



図4 『好色安万於布襦』巻二ノ一（15ウ）



図5 菱川師宣『好色いと柳』上巻

なお、今一点、図版掲載は省略するが、『好色安万於布襦』巻四ノ二の春画（43ウ、44オ）と、師宣の春画の関連について触れておく。『好色安万於布襦』巻四ノ二では、盲目の女芸人である若い瞽女の家に、男が忍んで情事に及ぼうとする。しかし、年配の瞽女が同じ座敷に寝ているため、若い瞽女が、男の膝の上に座り、三味線を弾きながら色事をして、年配の瞽女の手前をごまかす。挿絵では、その場面の春画が描かれている。

このように、女性が男性の膝の上に乗る、三味線を弾きながら色事をする春画については、男女の色事の様々な方法を集めて描いた師宣の艶本『恋のむつごと四十八手』（延宝七年「一六七九」刊）の「曲茶臼」に描かれている。白倉敬彦は、この「曲茶臼」について、次のように述べている。

目立った趣向なので、後続作も多いけれど、知られた図柄だけにその力量が計られる分、誰もが描くといったものでもなかったようだ。しかしこうした図柄の追跡は、画師間の遠近関係が見えてきて興味深いものがあり、今後もつとめて拾い出していくことにしたいと思う。その点では、こうしたはつきりとした特徴のある図柄はその継承関係が見やすく、貴重な存在である。⁽²⁾

このような指摘からも、『好色安万於布襦』の画師と師宣の挿絵の近さは想定出来よう。以上の事例から、『好色安万於布襦』の挿絵を、現時点では「師宣風」としておく。しかし、『好色安万於布襦』の春画の中には、やや稚拙に見える挿絵も混じっており、今後の検討が必要である。

なお、前述した「日本古典籍総合目録データベース」で、本書の刊年を「元禄年間刊?」としているのも、「師宣風」の挿絵から見て妥当だと考える。

六 まとめと今後の課題

以上、小稿では、未紹介の艶本『好色安万於布襦』について、祐信画の艶本『艶色玉簾』との取り合わせや、春画にセリフなどを書き込む享受のあり方、養生書『黄素妙論』の受容、「師宣風」の挿絵など、現時点で気付いたことを点を描した。

一方、今回は、肝心の「浮世草子の艶本」としての本作の作風について、十分に述べることができなかつた。概して、男女の色事の露骨な描写に主眼を置いた話、艶笑譚的な話が多いが、中には、同時代の作品との比較検討が必要な話もある。

たとえば、巻二ノ四「遊女」と、巻三ノ四「風味ふうみをわすれぬ遊女が実心じつこ」では、いずれも吉原の遊女を登場させ、「ゆふぢよにじつなしと、いひそめしやつこそにくけれ」(巻二ノ四、22オ)、「うかれめにじつなしといへれど、さにあらず」(巻三ノ四、36ウ)といった「遊女の誠」を説く文章が記されている。

「遊女の誠」は、延宝期頃から遊女評判記で説かれ、その影響下に、貞享期頃の井原西鶴の浮世草子や近松門左衛門の浄瑠璃などでも描かれたものである。²²⁾『好色安万於布襦』巻二ノ四、三ノ四に見える「遊女の誠」についての文章も、そのような風潮の中、描かれたものであろう。しかし、西鶴や近松の作品における「遊女の誠」に比して、『好色安万於布襦』巻二ノ四、三ノ四では、その「誠」が、肉体的、性的な側面を強調して描かれているところが特徴的である。

すなわち、巻二ノ四は、遊女が客に、遊女との床入りでの秘伝を身を以て教えて客を喜ばせ、客は他の遊女との床入りでもその秘伝を試してうまくいったという話、巻三ノ四は、吉原の客である医者が長崎で入手した房中薬を遊女との情事に利用して、遊女を夢中にさせたといった話で、薬の製法まで記しており、いずれも遊廓版『黄素妙論』とでも言

うべき趣を持っている。これらの話については、「遊女の誠」を説いたり、床入りの秘伝を説く遊女評判記類や茶屋案内記類などとの関連も想定出来よう。

以上のように、『好色安万於布襦』については、春画の検討だけでなく、同時代の他作品・他資料（好色物・艶本以外の作品や資料も含む）を視野に入れた作風の検討も必要であることを記して、稿を締め括りたい。

注

- (1) 石上阿希編『西川祐信を読む 西川祐信研究会論文集』（立命館大学アート・リサーチセンター、平成25・3）所収、白倉敬彦編「西川祐信春画目録」115頁など参照。
- (2) 林美一『艶本江戸文学史』（河出書房新社、平成3・8）40頁において、浮世草子の「好色物中の艶本的性格を持つ作品の謂」という定義で使用された用語。
- (3) 自笑と其磧の確執については、長谷川強『浮世草子の研究』（桜楓社、昭和44・3）「第二章 其磧・自笑確執期（正徳初〜享保三年）」285〜324頁参照。
- (4) 松平進「祐信絵本の版行と普及」7頁（『浮世絵芸術』53 日本浮世絵学会、昭和52・9）。
- (5) <http://basel.nijl.ac.jp/info/ib/meta/pub/CsvSearch.cgi>、平成28年11月28日閲覧。
- (6) 『補訂版国書総目録』第一巻（岩波書店、平成元・9）「引用書目一覧」17頁に「日本艶本目録（未定稿）（林美一、国書研究室蔵、稿本）」とある。
- (7) <http://www.dh-jacnet/db1/ehoncatalogue/about.php>、平成28年11月28日閲覧。
- (8) 永青文庫での盛況については、京都新聞デジタル版（平成27年12月22日）の記事、細見美術館での盛況については、朝日新聞デジタル版（平成28年3月7日）の記事など参照。

- (9) 林美一著、中野三敏・小林忠監修『林美一 江戸艶本集成第一巻 菱川師宣・西川祐信』（河出書房新社、平成25・3）所収「菱川師宣の生涯」63～67頁、「夜の師宣（全艶本作品の解題）」80～135頁など参照。
- (10) 『SHUNGA』（永青文庫 春画展図録）（春画展日本開催実行委員会編、平成27）256頁参照。
- (11) 注(9)前掲書308頁掲載の師宣「表四十八手」（延宝七年「二六七九」刊）の「明別（あけのわかれ）」などにも後人の書き入れがある。艶本における後人の書き入れは珍しくないかもしれないが、『好色安万於布襦』では、後人の書き入れが春画全般にわたっているところが注目される。
- (12) 「まつくろぼう」は意味未詳。
- (13) 石上阿希『日本の春画・艶本研究』第一部第一章「日本春画における外来思想の受容と展開」46頁。
- (14) 吉田幸一編『好色伊勢物語』（古典文庫、昭和57・3）翻刻編9、10頁。
- (15) 国際日本文化研究センターデータベース「艶本資料」（<http://db.nichibun.ac.jp/ja/category/enbon.html>）。
- (16) 注(13)前掲書第二章「中国養生書と艶本——『黄素妙論』の受容を中心に」55～89頁。
- (17) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2541834>
- (18) <http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/mg5/image/mg5shf/mg5sh0035.htm>
- (19) 文化五年本の目次掲載の題は、次の通り。振り仮名は省略した。「天真論」「交合和違」「九勢之要術」「浅深利害損益之弁」「八深六浅一深之論」「五傷之法」「淫情十動之候」「時節善悪之弁」「交所吉凶之弁」「房中之薬術」「道三之跋」。
- (20) 注(9)前掲書118頁。
- (21) 白倉敬彦『春画の色恋 江戸のむつごと「四十八手」の世界』（講談社学術文庫、平成27・9）72頁。
- (22) 拙稿「『世継曾我』廓場考」（『女子大國文』125号、平成11・6）、「近松浄瑠璃『三世相』小考——「さんげ物語」と遊女の誠論を中心に——」（『女子大國文』128号、平成12・12）など参照。

（付記） 小稿を成すにあたり、京都女子大学図書館、国際日本文化研究センターなどの諸機関に、多大なるご高配にあずか

りました。記してお礼申し上げます。

(本学教授)